

No.1 子猫を飼い始める!!



自分で健康管理ができる人間とは違い、猫は自分で生活の環境を整えたり、ストレスを自力で避けたりすることはできません。すべて、**飼い主さん次第**ということになります。

ここでは、あなたが**猫と末永く健康に暮らすためのコツ**、つまり猫の世話をするとき**に注意したほうが良いポイント**をまとめました。**不安**

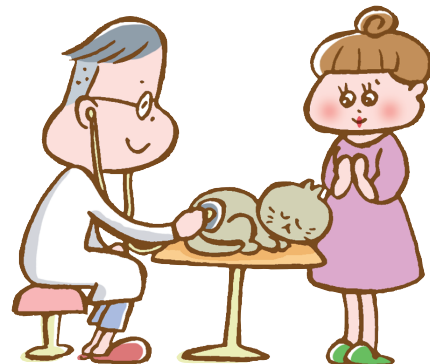
に思う点や疑問があれば、信頼できる動物病院を探して相談しましょう。

※猫の寿命は人間の約5分の1で、「猫の1年」は「人間の5年」に相当すると言われています。ここでは、0~6カ月齢の猫を子猫と呼ぶこととして(人間の年齢に換算すると、およそ0~12歳に相当)、そこから1歳齢で体の成長が完了するまでの間に注意すべきポイントをまとめました。



まずは動物病院へ

何か病気をもっていないか検査を受けたり、また一緒にいて気になる点があれば気軽に相談しましょう。これは猫が小さいときに動物病院へ行っておくことで、「病院に慣れる」という意味も含んでいます。ですから、信頼できるかかりつけの動物病院を探しておくことが大切です。できれば、年に1、2回、回数を決めて、定期的に健康診断を受けるようにしましょう。



動物病院では…

- カウンセリング:生活環境、食事、排泄、同居する動物、性格などの相談
- 身体検査:視診、触診、聴診など
- 栄養状態:体重、体型、フードの相談
- 感染症の検査:猫白血病ウイルス・猫免疫不全ウイルスの検査
- その他:検便、検尿、血液検査など

※このような検査を健康なときに受けておくことで、病気の早期発見や予防に役立ちます。

Point to be checked

確認事項

動物病院で聞いておきたいこと

猫と暮らしていくうえで気になること、不安なことは遠慮せずに聞いておきましょう(疑問が解決したら、下のボックスに☑を入れましょう)

- 生活全般**
食事の場所、遊び場、トイレ、爪とぎの場所
- コミュニケーションのとり方**
遊び方、人やほかの動物(同居する犬や猫など)との交流方法
- 家庭でのケア**
ブラッシング、爪切り、耳そうじ、歯磨き、目の周りのケア
- 猫の品種によっては、かかりやすい病気があります**
- マイクロチップ**
迷子になったときや災害に備えて、マイクロチップの挿入をおすすめします。
- 雌の不妊手術、雄の去勢手術**
雌では生後5カ月齢頃、雄は8カ月齢頃から発情が始まります。かかりつけ獣医師に相談のうえ、手術を受けましょう。不妊・去勢手術を早めに行うことで、雄ではマーキング、雌では発情期の鳴き声が減るなど、性ホルモンに左右されない性格になることが望めます。

気になることは、遠慮しないで聞いておこう。確認し忘れたら次回聞いてみよう!



STEP
2 病気を予防しましょう

子猫が死亡する原因として、もっとも多いのが感染症です。そのほか、寄生虫などの予防も大切です。病気の予防について疑問があれば、かかりつけの動物病院に相談しましょう。

●**ワクチン接種**：3種混合ワクチン（猫伝染性鼻気管炎、猫カリシウイルス感染症、猫パルボウイルス感染症）を少なくとも接種しましょう。※生後第1回目の混合ワクチン接種時期の目安は2カ月齢、第2回目は3カ月齢です（その後も追加接種が必要です。追加接種の間隔については、かかりつけの獣医師に相談してください）。

なぜワクチン接種が必要なの？

子猫の死亡原因で、一番多いのがウイルスによる感染症です。ワクチンはウイルスや細菌によって引き起こされる感染症から猫の命を守ります。いくつかの病気は、ワクチン接種によって簡単に予防することができます。

なぜ子猫は2回も接種するの？

産まれたばかりの子猫は、母乳から得た抗体によって、数週間～数カ月間は病気から守られます。でも、子猫自身の免疫が発達する前に母乳からの抗体が減ってしまったら、病気に感染しやすくなります。また、子猫に母乳からの抗体が多く残っている間にワクチンを接種しても、ワクチンによる予防効果はうまく発揮されません。それぞれの子猫で母乳からの抗体がワクチン接種に適する程度まで減ったかどうか予測することができないので、できるだけ多くの猫を病気から守れるように、連続したワクチン接種の実施が国際的なガイドラインで推奨されています。

ワクチン接種の際は、健康状態、年齢、生活環境、地域でどんな病気が流行しているか、それぞれのワクチンによる予防効果など、多くの事柄を考慮してその方法や間隔を決める必要があります。ほとんど家の中で過ごしている猫でも、さまざまな事情（旅行や宿泊、ほかの猫との接触、家庭に新しい猫を迎えた場合や人の服からのウイルスの伝播）から病気にさらされる可能性があり、ワクチンを接種する必要があります。かかりつけの獣医師が、あなたの猫に適したワクチン接種スケジュールを考えてくれますから、相談してみましょう。

●**消化管内寄生虫対策**：猫回虫は食欲不振、嘔吐、下痢、発育不良を引き起こしますが、まったく症状がないこともあります。猫同士でうつしあったり、母猫からの母乳で子猫に感染することもあります。この猫回虫は人にも感染することがありますので、気をつけましょう。

●**猫のフィラリア症予防**：犬のフィラリア（犬糸状虫）が猫の肺の血管や心臓に寄生して、咳、呼吸困難、嘔吐、突然死を引き起こすことがあります。

※フィラリア症予防薬・消化管内寄生虫駆虫薬を飲ませる時期の目安は2カ月齢からです（地域や季節によって異なります）。

●**ノミとマダニの対策**：犬、猫に寄生するノミのほとんどは猫ノミです。人がこのノミに咬まれると、激しい痒みが長期間続きますので、予防しておくことが大切です。また、猫にマダニが大量に寄生すると貧血を起こすことがありますし、最近では、マダニから人に重い病気が感染することも話題になっています。

※地域や季節、ライフスタイルなどを考慮して、予防しましょう。

子猫のときは、とくに感染症に注意!!
病気を予防しながら
たっぷりかわいがってね!



REFERENCES / 参考図書

AAFP-AAHA Feline Life Stage Guidelines
『ねこのお医者さん』石田卓夫・著（講談社）、『猫と暮らすと幸せになる77の理由』石田卓夫・監修（Collar出版）
C. A. Tony Buffington, What Cat Owners Can Learn About Captivity, NAVC Clinician's Brief, 2011.
2013 AAFP Feline Vaccination Advisory Panel Report

Health condition check

健康状態の観察

健康状態を観察しましょう

「あれっ、なんか変だなあ。連れて行ったほうが良いのかな?」と思ったら、迷わず動物病院へ連れて行きましょう。こんなところをチェックしてみると良いかもしれません。（確認したら、下のボックスに☑を入れましょう）

尿と便：量、回数、色、におい、尿や便をした場所



大腸炎が疑われる猫の下痢

担当医から一言

嘔吐：回数、吐いた物



猫の吐いた物

担当医から一言

食事：フードの食べ方（食べにくそう、こぼす）、食欲、水の飲み方

口のなか：舌の色、口のおい、歯石の有無

その他：呼吸の状態、皮膚の状態、グルーミングの状況



アレルギーによる猫の皮膚炎

担当医から一言

異常がみられたら、動画や写真に記録してかかりつけの獣医師にみてもらうのも良いでしょう。